

【大学等・一般の部】最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

## 祖母への手紙

埼玉県所沢市（別府市出身） 小松崎 潤

僕の故郷は別府市。僕が続けてきたこと。それは祖母に手紙を書くことだ。きっかけは僕の上京だった。僕はそれまで別府で祖母と二人暮らしをしていた。祖母は耳も不自由で何をするにも一人では危なっかしかった。ふきこぼれる鍋の音も集金の呼び鈴も聞こえなかった。僕も気が気ではなく、学校以外は祖母に付きっきりになった。料理もやったし、風呂にも入れた。プライベートはなかった。だけど親のいない僕を育ててくれた恩が返しきれないくらいあった。だから祖母の介護を苦痛とも思わず、むしろ少しでも心地よく過ごして欲しいと思った。結局、その経験が介護を志すきっかけになった。

そして二十歳のとき。東京での就職が決まった。それと同時に祖母もグループホームへの入所が決まった。しかしそれは苦渋の決断だった。僕は祖母を見るため別府での就職を考えた。だけど外国人介護士の受け入れをしている施設にも興味があった。なぜなら超高齢化を迎える日本で外国人介護士の育成は必須。東京ならそれが実現できた。しかし祖母を置いて行くわけにはいかない。ましてや連れていくことなんか。僕は悩みに悩んだ。だけど悩む背中を祖母が押ししてくれた。

「ばあちゃんのことはいいから、自分の人生、大事になあ」

こうして僕は上京を決意した。しかしすぐに祖母の施設から連絡がきた。

「ちょっと元気がないようで」

僕は己の選択を後悔した。一番大事にしなきゃならないのは祖母なのに。すぐさま飛行機で別府の祖母を訪ねた。

「ばあちゃん」

祖母は泣いて喜んだ。僕はその涙に別府へ戻ると約束した。しかし祖母は僕の退職を許さなかった。けれど「話をしに来て欲しい」と言う。そうは言っても毎日は無理だ。すると「手紙が欲しい」と言い出した。

僕は東京に戻るなり祖母に手紙を書くことにした。だけど最初はペンが止まってしまった。顔をみれば言葉が見つかるのに離れていると何を書いているかわからない。そんなとき、ふと「話をしに来て欲しい」と言った祖母の悲しそうな顔が浮かんだ。あの顔を笑顔にするにはどうしたらいいんだろう。そこで僕は写真を入れることにした。園庭に咲いた桜。豆まきの鬼のコスプレ。初めてできた彼女。もちろん写真と一緒に手紙も添えた。すると祖母は大喜びで部屋に飾りだしたと言う。僕もそれを聞いてさらに励みになった。確かに祖母は耳が遠いので電話で話すこともできない。距離も距離なので会って話すこともできない。だけど写真と手紙だからこその会話もあるような気がした。それは言葉では言えない正直な気持ち。普段はぶっきらぼうな僕も手紙の中では素直でいられた。

こうして祖母への「ラブレター」も十五年で千通を超えた。元号も切手代も変わった。だけど祖母への感謝は今も変わらずにある。勤続十五年。ふり返ると山あり谷あり谷底ありだった。外国人の同僚とのコミュニケーション。それは文化の違いから困難を極めた。ならば自分がという思いで英会話スクールにも通った。それでもぶつかり合った時には心が折れそうになった。だけど祖母は返してくれた。「お前ならできる」と。すると同僚との摩擦でさえ明日への情熱に変わった。いい写真といい知らせのためにがんばろうと思えた。

「話をしに」

そんな祖母の言葉をきっかけに始まった手紙のやりとり。今日も僕は祖母に手紙を書いている。郵便番号は874-0042。何となく「ハナシヲシニ」と読めるような気もする。祖母が今日も手紙を待ってる。そんな気持ちで今日は生まれたばかりの息子の写真を入れた。ばあちゃん、今度会いに行くよ、と。